割礼狂時代

稗田東夷人

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

【作品タイトル】
割礼狂時代

【Ｎコード】
Ｎ４６８６Ｄ

【作者名】
稗田東夷人

【あらすじ】
『割礼四景』の時期より数年前、躾が特に厳しい家庭で割礼が行われ始めたころの話です。体罰を何のためらいもなく加える厳しい母親に割礼を強いられる女の子の受難と、そして、成人したその女の子の目を通して、『割礼四景』の舞台になったすべての女の子にとって割礼が通過儀礼になった時代のその後をとりあげます。

第一章

朝ではあったが外はまだ暗かった。ちゃぶ台を挟んで向かい合って座った母が真砂子をにらみすえていた。この春に推薦で私立中学への入学を決めたばかりで、まだ小学生の真砂子だった。怒りの形相もすさまじい母にたたき起こされた父も眠そうに頭をかきながら母に隣に座った。三人ともパジャマのままで明け方の居間は寒いのだが、この母を前にストーブをつけようと提案できる雰囲気ではなかった。

六年生になってすぐ、真砂子は通っていたピアノ教室をやめた。もともとは母に命じられて通い始めた教室だった。授業が厳しく、間違えれば指揮棒で手の甲をたたく指導だった。通うのはつらかったが、ようやくある程度の曲を弾きこなせるようになり、もう少しでピアノを一生の趣味にできるところだった。自分の知らないうちに退会届を出されていたと知ったとき、真砂子は一人で泣いた。かわりに学校が終わるとすぐに学習塾へ通う生活が始まった。学校から帰宅すると、そのまま自転車で塾へ向かい、帰るのは夜中だった。宿題を終えればもう後は寝るだけの時間しかなかった。母に管理されることには物心ついたときから慣れてしまっていた真砂子だった。そんな単調な毎日のうち真砂子はちょっとした楽しみを見つけた、塾から自宅に帰る途中、ちょっとした長い坂道があるのだった。その坂道の歩道がレンガで舗装されていて、スピードを出して走りすぎると、一分ばかり微妙な振動がサドルから伝わるのを発見した。無論、最初のうちは箱入り娘の真砂子にとって、痒いような奇妙な感覚で、それがなんとなく心地よいという程度のものでしかなかった。友達は多いほうではない真砂子だったが、学校へ通っていればそれなりにクラスメイトからいろいろ吹き込まれることもある。クラスの男子の会話から女にも示威があることを知ったのはそれから

しばらくたってからだった。サドルにあたった股間の奇妙なむず痒さと自慰、それが真砂子の頭の中で結びついたとき、好奇心を抑えることはできなかった。無論、悪い好奇心ではない。しかし、世間の空気が変わりつつあった。もともとは性交渉をする年齢が下がり続けていると子供の早熟化がセンセーショナルに報じられたのがきっかけだった。ちょうど時を同じくして、少年少女の性的非行に起因する事件が相次いだこともあって、モラルパニックの果てに起こったのは、偏狭な禁欲教育だった。中学生向けの保健体育の教科書に性交渉は生殖の手段であり快楽のために行うのではないと記載するかどうかで国会がゆれていたころ、ある診療内科医が出版した『純潔教育ノススメ』という本が話題を呼んだ。家庭では性差を前提とした躾を行うこと、そして、男女の役割について伝統的な価値観に立ち返るというものだった。特に女子に関しては性の情報から隔離すること。そして、性的な早熟の原因となる自慰は断固禁止すること。その手段として最終的に性器の切除を提案していた。真砂子にとって不幸なことは母がその本に全面的な共感を示したことだった。真砂子の家庭だけではなく、このころから躾の厳しい家庭で女子の性器切除が現実にはじまり、一部の医療機関では医師が手術を引き受けるようになった。ほとんどの高校で女子に性器切除を義務づけるようになるまで十年はかからなかった。そのころにはこの性器切除は割礼と呼ばれ、女子が通らなければならない通過儀礼とみなされるようになっていた。

　春とはいえ明け方の寒い居間で真砂子は母と向かい合っていた。真砂子が座布団も敷かずにきちんと膝をそろえて正座しているのはうっかり膝を崩した途端に母の怒りが爆発しそうだからだった。

「真砂子、なんで母さんが怒ってるのは何でか分かってるわね。今回は父さんにも聞いてもらいますからね。」

母はそう言うと真砂子だけではなく眠そうに目をしばたかせていた父までぎろりと睨みすえたのだった。

「この前のことで次はないとはっきり言ったわよね。反省して覚悟

はできてるわね。」
母が言った。普段から抑揚をつけないで話す母だったがこういうときは特に恐ろしかった、薄い唇がこの日は特に冷酷そうな印象だった。
「はい。」
真砂子は母の目を見て明瞭に答えた。言いよどんだり余計なことを言えばかえって代償は大きいと真砂子は知っていた。受け答えのときはまっすぐに目を見て話さねばならなかった。目線が動くのは嘘をつくときだというのがこの母に持論だったからだ。
　真砂子にとって初めての自慰は強烈な体験になった。きっかけは股間を洗うためにあてたシャワーだった。奇妙に心地よいむず痒さに真砂子の小さな体がぴくりと痙攣した。気がつけばクラスメイトよりだいぶ発育のおく入れた乳房の上で乳首が勃起していた。これが性欲なのだと晩生の真砂子も自覚した。湧き上がる好奇心で股間に手を伸ばしかけたとき、母の声がして真砂子はあわてて風呂場を出た。こういう行為に母がどう反応するか真砂子はよく分かっていた。その晩、両親が寝静まる時間になっても真砂子は眠れずにいた。布団の中で横向きに胎児のように体を丸めた真砂子がそろそろと股間に手を伸ばした、パジャマのズボンの中に手を入れて、コットンのパンツの上からまさぐってみると、クロッチがしっとりと湿っていた。自分お体が知らないうちに成熟へ向かっていたことが真砂子には新鮮な驚きだった。そのクロッチを勃起して押し上げている突起があった。それがクリトリスということを真砂子は最近知った。真砂子はクロッチの上からそっとそのクリトリスを人差し指の腹でなでた。例のむず痒さが次々と登ってくる感覚だった。声が漏れそうになるのをかみ殺して続けるうちに真砂子の全身が汗ばみ、頭までずっぽりともぐった布団の中が甘酸っぱい体臭で満たされた。丸まった真砂子の体が二回ほど小さく痙攣したのがはじめての絶頂だった。不通の少女である真砂子だから母や世間が言っているように自慰は悪いことなのだと教えられたままに信じていた。それでも心

地よい疲労感と何かいたずらを成功させたような満足感はあった。朝までの短いじかんだったがぬれた下着とズボンは布団の中で脱いで、真砂子は心地よく眠った。自慰が習慣になってから母に発見されるまでは時間はかからなかった。子供のプライバシーは無用と鍵をつけさせてもらえないドアがいきなり開いたのだった。下着やパジャマを汚さないように下半身が裸だったから言い訳のしようもなかった。母はいきなり棚の上の目覚まし時計を引っつかむとそれを実の娘に向かって投げつけたのだった。時計は真砂子の額に当たって壊れた。額を切って血を流している真砂子にかまわず母は勢いよくドアを閉め、廊下からドア越しに思いつく限りの悪罵を浴びせたのだった。

「次はないと思いなさい！」

最後に母が行った。荒々しい足跡が遠ざかっていくのを聞いて真砂子はしくしくと泣き出した。あの母の前では泣くことさえ許されないのだった。子供は涙で大人を操ろうとする、だから涙を流したならばよりいっそう厳しく叱らねばならないと、どこかで仕入れた考えを頑なに守っている母だった。

寒い居間で母の詰問は続いていた。

「約束を破ったでしょ。次はないって言ったでしょ！」

顔を真っ赤にした母が言った。約束といっても母が一方的に言い渡したことではあった。隣の父があまり関心を示さず、自分に加勢しないのが気に入らないらしく母がいらだち始めた。かかわりあいたくないと言わんばかりの顔で父は黙っていた。給料袋をそのまま母に渡した時点で、家族への義務は果たしているつもりなのだろう、万事がこの調子の父だった。

「はい。」

真砂子も余計なことは言わずに返事だけをした。この後にどっちにしろ折檻が待ってるのはわかっていた。

「それじゃあ、分かってるわね。膝の上にきなさい！」

母が言った。いよいよつらい体罰が始まるのだった。

母に見つかって以来、真砂子は自慰をやめた。勉強に疲れるとかえって寝付けないことがあり、そういう夜などはあの多幸感が恋しくなることはあった。やめたのは母が恐ろしかったからだった。この日は週末だからいつもより多い宿題を終えて布団に入ったものの寝付くことができず、明け方にようやく眠気がやってきた。やっと眠れると思ったとき、尿意をもよおした真砂子はしぶしぶトイレに起きたのだった。まだ出回り始めたウォッシュレットがおかれているのは真砂子の父が痔を患ったからだった。真砂子が小水をはたいてビデのボタンを押した。ところが、水温を調整するつまみを誰かが触ったらしく、存外に高い温度で温水が噴出した。じんわりとした温かさがしばらく自慰の刺激と遠ざかった股間に心地よく、ついたのだった。娘の一挙手一投足を監視することを当然と考える母がマイナスドライバーを持ち出してきて外から鍵を開けたのだった。ビデの心地よさについ呆けてしまった時間は長かったようだった。こういうところでは恐ろしく勘がはたらく母に真砂子は頬を上気させている現場をおさえられてしまった。

「お父さんを起こしてくるまで、居間でまってなさい。」

母はそれだけ言うと、顔面蒼白な真砂子を残して行ってしまった。

真砂子はパジャマのズボンをパンツごと膝まで下ろした。言われなくとも自分からやるのが余計な罰を食わない方法だった。父親とはいえ男だから真砂子だって下半身を見られるのは恥ずかしかった。朝早くたたき起こされて迷惑だといわんばかりの態度でそっぽを向いている父は兆手でまだ毛も生えていない股間を隠す真砂子のほうは見ていなかった。覚悟を決めて真砂子は母の膝の上にうつ伏せになった。物心ついたときから躾といえば体罰だったが、さすがに六年生ともなればこの罰は恥ずかしかった。ましてや無関心とはいえすぐ隣に父までいた。こういう辱めを与える方法ではこの母は実に

よく知恵が回った。いきなり母の平手が最近ようやく女らしい丸みを帯び始めた真砂子の白い尻に振り下ろされた。
「うっ！」
不意にぱーんと乾いた大きな音と同時に痛みが走り、真砂子がうめいた。真っ白な肌にくっきりと手の跡がついた。その同じ場所にまた平手が振り下ろされた。泣いてはならないと必死に耐える真砂子だったが、目頭が熱くなり、すぐに大粒の涙が畳に落ちた。歯を食いしばって嗚咽をこらえる真砂子に容赦なく母は平手を浴びせた。たちまち白く滑らかな尻が真っ赤に染まった。痛みだけでなく。恥ずかしさと惨めさで真砂子の顔も真っ赤に染まっていた。ようやく母が平手を打つのをやめた。真砂子を膝から下ろすと母は自分の掌をさも痛そうにさすった。仕置きが終わってようやく泣くことが許される。真砂子はズボンを直すこともしないで両手で顔を覆って啜り泣きを始めた。
「なんで泣くの。自分が悪かったんでしょ。泣いて許してもらうつもりでしょ。」
真砂子が泣き出すのを待っていたように母が言った。まだ母に折檻を終えたつもりはなかった。真砂子は自分の迂闊さを呪った。真砂子はしゃくりあげながら両手をひざに置いて正座した。真砂子の顔は涙と鼻水にぬれて、目は赤く充血していた。
「父さん！物差しを持ってきてちょうだい！」
母の言った言葉に真砂子がびくりとした。物差しというのは製図用の九十センチもある幅広のものだった。無論、そんな専門家が使いような定規に用があるわけではなく、真砂子を折檻するために置いてあるのだった。それも、いつも通る廊下の壁に掛けてあった。それを見るたびに真砂子も母の恐ろしさを思い出すのだった。最後にその物差しで打たれたのは半年以上も前のことだった。塾のクラス分けで特別クラスには入れなかった真砂子に怒った母が分厚いアクリルの物差しでしたたかに真砂子の肩を打ったのだった。骨まで響くような痛さはもちろん覚えていた。それを今度はむき出しの尻、

それも散々に平手打ちを受けて燃えるように痛んでいるところへうちすえる気らしかった。無言で居間を出て行った父が物差しを持って戻ってきた。
「あなたがやりなさいよ！父親でしょ！」
物差しを手渡そうとする父に母が噛みついた。これ以上の面倒はごめんだと父はあきらめたようだった。母は真砂子をちゃぶ台の前でひざまずかせ、そのまま上半身をちゃぶ台の上に預けさせた。真砂子は物差しを持って立つ父に向けて尻を突き出す姿勢になった。親とはいえ男だった、父からは真砂子の股間、思春期の少女でなくても見られたくはないそこが見えているはずだった。母の残酷さを真砂子は恨んだ。母が真砂子の上半身に体重をかけて圧し掛かりあごを引いて合図した。物差しがびゅんと風切音をあげて振り下ろされた。爆竹ほどの破裂音だった。
「きゃあ！」
真砂子が悲鳴を上げて逃れようとした。抵抗すればもっと酷い仕打ちが待っているのだが、とても耐えられる痛みではなかった。必死で逃れようとする真砂子を母が押さえつけた。小柄な真砂子にとって長身の母の腕力は恐ろしいほどだった。
「いや！許して！もうしないから！お母さん許して！」
必死で首を振って許しを請う真砂子の涙で濡れた頬におかっぱに切りそろえた黒髪が張り付いていた。二発目を振り下ろすのをためらっている父を母が睨んだ。この母に逆らってまで父は娘を庇わない。手加減すらない二発目が先刻とは反対の尻たぶに振り下ろされた。声を枯らして泣く真砂子の尻が次々と容赦なく打たれた。分厚いアクリルの板でそれも男の力で振るわれるのだから真砂子にとっては気が狂ううほどの痛みだった。物差しの縁が当たった尻の皮膚は蚯蚓腫れになった。何発も打つうちにその蚯蚓腫れが破れ血がにじむのだった。
「まだよ！こんなもんじゃ許さないんだから！」
血を見て怯んだ父に向かって母が吠え掛かるように言った。母は暴

れて逃れようとする真砂子を全身お力で押さえつけて息を切らしていた。汗だくのは顔を真っ赤にして髪を乱した怒りの形相は般若のようだった。ぜいぜいと息を切らして喘ぐ真砂子の苦しみはまだまだ続くのだった。

　百発までは母も数えていたらしいが、その母も数を忘れるほど打ち据えられてようやく摂関が終わった。真砂子はパジャマのズボンをあげる気力すらなく畳の上で体を丸めてすすり泣いていた。

「自分が悪いのになんで泣くの？あなたはいつもそう、反省がないから同じことをするのよ。」

真砂子を見下ろして母が吐き捨てるように言った。父はすでにいない。出社する時間まで少しでも眠るつもりだった。日曜日なのに会社に出るの家に居たがらない父ｄだった。母がくるりと背を向けて出て行こうとするのが見えた。この母がいなくなれば思う存分泣けるのが今の真砂子にとっては慰めだった。その母が廊下に出る前に振り返って言った。

「いつも通り起きて塾へ行くのよ！成績が落ちたらこんなものじゃ済ませないからね。」

この母に優しい言葉は期待しない真砂子だったがこういうときは特にこの冷酷さがこたえた。真砂子の目に新たな涙がたまってこぼれた。

「そうそう、予約を取っておくから来週は病院へ行くわよ。塾に行ったら来週は休みって言っておきなさい。」

母の言った病院という言葉に真砂子ははっとした。差筋が寒くなって体を起こしたときにはもうそこの母に姿はなかった。この状況で病院といえば、性器切除を受けさせせられるということだった。クラスメイトの間でもこの恐ろしいことが話題に上ることはあった。躾の厳しいどこかの家の女の子が受けさせせられたという話は真砂子もいくつか聞いていた。普通の家庭の女子が性器切除を受けるようになるのはもう少し先のことで、みな怖いもの見たさの心理でそういう話を聞くのだった。その恐ろしいことが突然自分の身に降りかか

って、真砂子は愕然とするのだった。神経の塊と言ってもいいほど敏感な部分を切るのだった。ほとんどの場合、麻酔をしないことも真砂子は知っていた。真砂子の胸の中が恐怖でいっぱいなり小さな体ががたがたと震えた。

「いやー！いやだああ！」

誰も居ない居間で真砂子が叫んだ。早朝に近所中に響くような大声だった。母があわてて戻ってきて真砂子を叱り付けた。真砂子は母の足元にすがりついて哀願した。

「お願い！そんなこといわないで！ゆるして！」

パジャマの裾をつかみ、泣いて許しを請う真砂子の頬を母の平手うちが見舞った。

第二章

南太平洋にペクエノ諸島という島々がある。十六世紀にポルトガル人の船乗りに発見されて以来、小さい島々という意味の地名で地図に載っている。その名の通り、広大な外洋に小石を散らしたように小さな島々が点在するのだった。その数十ある島々のうち最大の本島にだけ二万に満たない人々が暮らしている。この小さな島がかつて一人当たりの国民総生産が世界一を記録する空前の経済的繁栄を享受したことがあった。その残骸である整然と区画された住宅街では今は一日のうち半分ほどしか電気が使えない。水道管の修理すらままならないため、島の半数の世帯は給水車に頼っている。手入れをする家政婦もいないため雑草が伸び放題になった庭に自然に根付いた熱帯の花だけが鮮やかだった。そんな街灯すらない島の夜といえば漆黒の闇だった。しかし、廃墟と見まがうような住宅地の外側にある盛り場には貧弱なネオンサインがつき、音楽が漏れていた。

舗装されていない盛り場の道をスクラップ置き場から引っ張り出してきたような車が行く。外国人向けのタクシーでこれでもこの国では最も値の張る交通機関だった。さっそく街娼の一人が窪みだらけの道をのろのろと行くその車に歩み寄ったが後部座席に乗っているのが女とわかると舌打ちして戻っていった。セックス産業がほとんど唯一の外貨収入になってしまったこの経済破綻した国では女を買いに来る男は珍しくもない。その一方で、外国の女となると見かけることとすら稀だった。

その盛り場にあるダンスホールの看板を掲げた一軒で今晩も淫靡なショーが繰り広げられていた。半地下になった室内に客席がしつらえてあり、中央に円形の舞台があった。舞台から最前列は特別料金がかかる。特別料金といっても先進国の基準がらすれば遊興費として払えない金額ではない。それでも、この国の公務員が受け取る

給与の丸一年にはなるのだった。舞台の上では地元の女だろうか、浅黒い肌を汗で光らせて全裸の少女が一昔前の日本の流行曲にあわせて踊っていた。ダンスというにはあまりに稚拙だったが、もとより観客はそんなものは期待していない。日本や欧米なら児童福祉がらみの法律に触れることが確実と思われるほどあどけない少女だった。剃ってあるのかまだ生えていないのか、毛の一本もない股間をさらして舞台の端にしゃがみ、客の目の前で腰を振って見せていた。舞台の最前列に陣取った男たちが時々手を上げる。今、舞台の上にいる少女の競をしているのだった。音楽が止んだとき最後に手を上げていたのは中年の白人だった。ホールの従業員らしい男にその白人がいくらかの金を渡すと。裸の少女は舞台を降りて、パイプいすに座った男の足の間に跪いた。これも従業員らしい女が男の下半身と少女の上からすっぽりとシーツをかけた。シーツの下で中年の白人の男根に少女は今晩の幕が下りるまで口唇愛撫を続けるのだった。最前列に陣取った中の数人に同じようにシーツがかけられていて中で動く人の形が見えた。

「さて、続きましていよいよ佳境。お待たせしました割礼ショーです！」

少し妙なイントネーションのアナウンスは女の声で日本語だった。地理的に近いだけに客の半数以上は日本人だった。第一次世界大戦から独立までの間、日本の委任統治領であったといういきさつもあって特にこの盛り場では日本語が使われることが多かった。派手なエナメルのコスチュームを着た司会の女が舞台に出た。アナウンスの声の主で、少女の首輪につながれた鎖を握っていた。後ろ手に縛られて犬用の首輪をつけられた少女は華奢な体で必死に抵抗するが、がっしりとした体つきの女に到底敵わず、舞台の中央に引き出されてしまった。

「さあ、今宵お集まりの紳士の皆さん。最初の娘はナターシャちゃんです！」

手に持った鎖を掲げて司会の女が言った。紹介された少女の目が青い。司会の女の褐色の肌に比べれば少女の肌は格段に白かった。かつてこの国が空前の経済的繁栄を謳歌していたころ、ハウスキーパーとして東欧から多くの女性が渡ってきた。経済状況の悪化とともに彼女たちのほとんどは故郷に帰るか他の先進国に働き口を求めて去っていったが、このような現地の男との間にできた混血児を残していったのだった。

「さあ、このナターシャちゃん。十三歳です。エッチなショーに出るのは今晩が初めてなんです！緊張して泣いちゃってます！皆さん！暖かい拍手を！」

舞台の上で震えながら泣いている少女の心痛などお構いなしに女の声は明るかった。場内から拍手と歓声が起こった。この少女、おそらくはナターシャなどという名前ではない。現地語の名前は客たちの耳になじまないため、西欧風か日本風の名前をでっち上げるのだった。

「はい！ナターシャちゃん！ぬぎぬぎしまーす！」

司会の女が少女の二の腕をるかんでぐいと前に押しやって言った。首輪がはずされて両手を縛ってあった縄も解かれたが、司会の女が後ろで仁王立ちになって威圧しているので逃げることはできない。羞恥心に震えながら自分で裸になる様を鑑賞しようという趣向だった。膝丈で袖なしの白いワンピース前をつかんだまま泣いている少女の耳元で司会の女が何かｐ脅し文句をささやいた。少女が大きくすすり上げ、一瞬顔を上げて開いた目は泣いて赤く充血していた。意を決したように少女は一気にワンピースを脱いだ。瑞々しい裸体が照明の下にさらされて、場内がどよめいた。身内の誰か、おそらくは親がこの少女を売り渡したに違いない。経済破綻以後、政府の機能は半ば麻痺し、この島国は部族社会に逆戻りしていた。盛り場で営業している娼館からこの手のホールまで、元締めは数人の部族長だった。その部族長が私兵同然の連中を抱えて、半ば公然と縄張りを構えているのだった。国家予算のほぼすべてを海外からの援助

に頼る政府だった。給与の遅配など日常茶飯事になっている警察は買収など簡単でこの部族社会にまったく介入しない。十三歳と紹介された通り、細身の未成熟な体ながら胸のふくらみは乳房としての体裁を整えつつあったが、ワンピースの下に少女はブラジャーをつけていなかった、白いショーツ一枚の姿で脱いだワンピースで前を隠し、少女はしゃがみこんでしまった、司会のアナウンスによればこの少女は自分が売られたことなど知らず、つい先刻まで自宅で家事をしていたのだという。ショーを盛り上げるための演出ではあったが作り話ではなかった。唯一の産業がセックス産業というこの島国ではこれほどに容姿の良い少女が金額しだいでいつでも買えるのだった。人間の値段が恐ろしく安いこの土地で売られてしまった身になってしまった少女に抗うすべはなかった、司会の女がうずくまった少女の耳元でまた何か脅し文句をささやいたようだった。すすり泣きながら少女が舞台の下にいる男に脱いだばかりのワンピースを差し出した。日本人らしいその男は汗の染みたその白い布地に顔をうずめて大きく息を吸った。

「ナターシャちゃんのワンピースはどんな香りですかぁ？」

水を向けられた男がニヤニヤ笑いをした。

「まあ！エッチなフェロモンがプンプンですって！ナターシャちゃん、バージンなのにエッチな悪い子ですね。」

司会の女が大仰は身振りで驚いてみせた。羞恥心を煽られ顔を覆って泣く少女の耳までが赤かった。そんな少女の反応に場内は熱気を帯び始めた。シーツの下で口唇愛撫を受けている男の一人が自分の足元に傅いている女の足で小突くと、シーツの下で上下していた頭の動きが激しくなった。

「さあ、ナターシャちゃん。昨日から履きっぱなしのパンツは誰にあげるんですか？」

司会の女が言っても少女は動こうとしなかった、そんな少女に一片の憐憫をかけるでもなく司会の女は膝でうずくまった少女を小突いた。舞台の上の座ったまま少女はなるべく足を開かないようにショ

ーツを脱いだ。
「はい！ナターシャちゃんはこのパパさんがタイプだそうです！」
司会の女に促されて日本人と思しき中年男にショーツを差し出す少女の腕が震えていた。だいぶ腹がせり出した中年男は受け取ったショーツを裏返して少女の見ている前でクロッチを嗅いだ。恥ずかしさで泣いている少女の反応を見ながらさらに舌を出してその染みを舐めた。
「はい、ナターシャちゃんのパンツはエッチなお汁の味だそうです！いけませんねえ。パパの教育的指導ですね。エッチなお豆をチョッキンしてもらいましょう！」
司会の女のアナウンスに会場がらどっと歓声が沸いた。割礼ショーというだけに最後は麻酔もなしでクリトリスを切断しなければ終わらないのだった。もちろん、この少女も自分がこれからどういう仕打ちを受けるか知っている。さめざめと泣く少女は女司会者に小突かれながら舞台裏へ引っ込んだ。この中年男は偶然に選ばれたわけではなく、事前に金を払っていた。司会の女は少女の最後にクリトリスを切り落とす役をやる、その中年男と簡単な打ち合わせをしていた。場内の照明が落ちた。再び明かりがつけられたときが残酷な見世物の始まりだった。
その一部始終を投光室から真砂子がカメラに収めていた。スクラップ同然のタクシーの後部座席に身を沈めて街娼たちに不審がられながらも自ら危険を冒して乗り込んできたのだった。日本で十代の少女たち性器切除を義務づける法律が廃止されて数年、行き過ぎた純潔教育の反動から再び盛り返した性の解放の機運に乗って真砂子はフリージャーナリストとして一目置かれる存在になっていた。真砂子の後ろで操作盤をいじっている投光係の若い男はすでに買収してある。その金でオーストラリアかニュージーランドに逃れるのだという。もちろん、この国に残っては投光係の命はなかった。真砂子とて危険極まりないことは変わりなかった。すで一度、買収したホールの従業員に撮影を依頼していたが、金だけを持って逃げられて

いた。もはや現地の人間は信用ならず、真砂子自らが乗り込んできた次第だった。日本で割礼法と通称される法律が施行され、多くの少女たちが義務として性器切除を受けていたころなら、ごく稀な例外で成人するまで割礼を受けなかった者をモデルに起用してカメラの前で性器にメスを入れて見せるものがポルノとして売られていた。カメラの回っていないところで麻酔を打ち、泣き叫ぶ様は演技というものがほとんどだったが、中にはリアリズムを追求し麻酔なしでメスを入れるものもあり、マニアの間で高い評価を得ていた。そして、そんなものが問題にならないほど高値で流通していたは少女たちが割礼法施行後に全国の中高校で相次いで作られた校則に従って、性器切除を受ける様子を隠し撮りしたものだった。割礼を施す医者と結託して、教え子が激痛に泣き叫ぶ様を撮影したのみならず、切除された性器を標本にして収集までしていた教師もいた。そして、日本での性器切除がごく一部のしつけの厳しい保守的な家庭と、厳格な校則による純潔教育を掲げる学校を除いてほぼ行われなくなり、その手の地下で流通していた商品の供給が止まった。わずかな間に日本ですっかり地下市場を形成してしまったマニア向けに、ペクエノ諸島で性器切除を見世物にしているとはじめて聞いたとき、あまりのことに真砂子は本気で取り合わなかった。しかし、このホールが割礼ショーなる出し物を目玉にすえて連日満員の盛況という情報が多方面から寄せえられ、ついに真砂子が取材を決意した。暗い投光室で真砂子は涙を流した。先刻の青い目の少女の心痛を思うと真砂子の胸がつぶれそうだった。しかし、この国では警察は人を守らない。一部始終をカメラに収めて公開することで、客の供給源である先進諸国の世論に訴えるほかこの残酷な見世物をやめさせる手はなかった、真砂子は胸の中で不幸な少女たちに自分の非力を詫びた。照明が再びともった。暗闇に中でショーの準備はすでに整っていて、先刻の少女はキャスターつきの椅子の上で股を大きく開いた姿勢をとらされて、四肢をビニールテープでがっちりと固定されてしまったいた。少女の明るい茶色の長い髪は緩やかにウェーブがついてい

かにも柔らかく軽そうだった。その髪が噴出した汗でべっとりと頬に張り付いていた。
「ナターシャちゃん、パパさんが愛の鞭でいやらしいところをチョッキンしてくれますよ。皆さん、ナターシャちゃんは涙を流して喜んでます！」
相変わらす司会の女の声は明るかった。ナターシャと勝手に名づけられた少女の後ろには辛うじて尻の上半分を隠すほど短い赤の腰巻だけをつけた女が二人控えていた。この褐色の肌の二人は観衆に肌をさらすことに慣れているようだった。同じ部族で取り仕切っている娼館から客がついていない手空きのものを融通しているのだった。観客に向けて舞台の上で股を開かされている少女の性器は大陰唇がぴたりと閉じて色素の沈着もほとんど見られなかった。陰毛は産毛が少量だけ柔らかそうな恥丘に乗っていた。その産毛も色素の薄い栗毛で目立たなかった。いくら人間が金でいくらでも買える国とはいえ、これほどの可憐さは貴重だった。観客の期待は否応なく高まった。先刻、指名された中年男が自転車のブレーキのようなものを握っていた。もともとは本当に自転車のブレーキだったもので、そのグリップとレバーだけ切り離したものだった。そのレバーからワイヤーが伸びて、先端が極細のスチール線の輪になっていた。レバーを握りこむとこの先端の輪が締まり、少女のクリトリスを切断するのだった。司会の女の指が包皮にすっかり埋もれたクリトリスをつまみ、少女の体がぴくりと痙攣した。少女のクリトリスが観客の前でそっと包皮を剥かれ、慎重にスチール線の輪がかけられると再び包皮が戻された。痛みを与えないように慎重な作業だったが無論のこと慈悲ではない別の理由があった。少女のクリトリスと中年男が握るレバーがつながった。司会の女が合図すると後ろに控えていた女二人が冷や汗でぬれて震えている少女の体に手をかけた。
「きゃあああああ！」
舞台に引きずり出されてからはじめて発した少女の声は甲高い悲鳴だった。女の一人が後ろから少女のまだ三角錐をした乳房を揉み、

乳首をひねり上げた。もう一人は手に持った筆で少女の横から股間をそろりと撫でた。正面からでないのは観客に少女の股間が見えなくなるからだった。二人とも安っぽいナイロンの赤い腰巻はひどく短い。少し前かがみになっただけで毛じらみ対策で陰毛を剃った性器が客席から丸見えだった。もっとも観客は椅子に縛られたまま下唇を噛んで、嫌々をする幼児のように首を振り続ける少女の可憐さに目を奪われ、腰巻を巻いた女たちの股間など見てはいなかった。

「ひぃいいい！」

中年男が握ればクリトリスがちぎれるレバーを高く上げた。脅かしてからかってやろうという残酷ないたぶりに少女は乾いた悲鳴を上げ、あとは観客にはわからない現地の言葉で何か叫んだ。恐怖で少女の股間から小水が吹き出た。量こそ少なかったが前列に陣取っている観客にはほのかなにおいが届いたはずだった。

「わあ！気持ちよすぎて漏らしちゃいました！ナターシャ、いやらしい！」

すかさず司会の女が茶化した。すでに少女の顔は涙と鼻水でぐっしょりと濡れていた。その少女の体がほのかに血の色を浮かせて、先刻からこね回されている乳首が勃起していた。もちろん快感があってのことではなく、性感帯を弄り回されたが故の単なる反射だった。股間に筆を這わせていた女がその筆を離した。ぴったりと閉じた少女の大陰唇を開くとそこに少量の粘液がたまっていた。ついでクリトリスの包皮が剥かれると薄桃色の粘膜に覆われた可憐な突起が痛々しく勃起して、掛けられたスチール線の輪が食い込んでいた。いよいよクライマックスが近いと観客の何人かはごくりと唾を飲んでその瞬間を待った。

「はい、ナターシャちゃん、ついにいきそうです！」

司会のアナウンスに場内がわわっと歓声が上がった。もちろんこんな状況で絶頂などありえないことではあったが、そんな言葉で少女をいたぶって観客を喜ばせているのだった。

「はい！カウントしまーす！さん！にぃ！いち！」

司会者の女に合わせて場内の観客がカウントダウンした。カウントがゼロになった瞬間に少女の乳房をこね回していた女が強く乳首をつねった。その痛みに少女がうめいた、
「はい、ナターシャちゃんいきました！悪い子に愛の鞭！」
少女の小さなうめき声を絶頂に至ったしるしと見做して、司会の女が手を振り下ろして合図した瞬間に、中年男が手に持っていたレバーを力いっぱい握った。
「ぎゃあぁ！！！！」
怪鳥のような悲鳴を上げて少女が狂ったように暴れた。体を縛り付けて乗せられているキャスター付の椅子ががたがたと揺れてあわや転倒しそうになり、腰巻一枚の女たちが二人掛であわてて支えた。勃起して充血したクリトリスを途中で切断したために出欠が多く、鮮血が股間を伝って舞台に滴った。すさまじい悲鳴をあげて苦悶する少女に観客は興奮し、ホールは割れんばかりの拍手に包まれた。その少女の股間にオシキドールが振りかけられた。わっと酸素の泡が立って出血は瞬時にあらかた止まり、血と混じった液体が舞台を塗らした。恐ろしく染みるその処置に再び少女は声を張り上げて泣いた。そうしてクリトリスを失った股間をよく観察できるようにしてから腰巻一枚の女二人はぜえぜえと喘ぐ少女を乗せたキャスター付の椅子を舞台下へ下ろした。これから客の間を回って割礼を終えたばかりの股間を見せて回るのだった。切り落とされたクリトリスは血にまみれてまだワイヤーの先端についていた。司会者はそれをつまんでショットグラスに満たしたウォッカの中に落とした。ゆらゆらと血の跡を引きながら肉片が沈んでいった。そのクリトリスを切り落とした当人の中年男は受け取ったグラスを高く掲げ、一気に飲み干した。客が血液を介しての感染症を恐れるためこれが供されるのは犠牲になる少女が処女である場合に限られていた。この中年男もこの貴重な機会を逃さないために、だいぶ割り増しになった金を払ったはずだった。
先刻の少女がまだ椅子に乗せられたまま客席の間を回っている間

にもすでに次のショーが始まろうとしていた。司会の女が西洋人らしい鷲鼻の男に葉巻を渡した。この男、日ごろからは幕をやる趣味があるらしく、自分のポケットから凝ったデザインのシガーカッターを取り出した。

「はい、皆さん！よく切れそうなカッターですよ。」

司会の女がシガーカッターを持った男の手を高く掲げて言った。今度はこのシガーカッターでクリトリスを切り落とそうというのだった。舞台に現れたのは浅黒い肌をした現地の娘で先刻の青い目の少女より幾分年上のようだった。アナウンスによれば娼館で働いていて、まだ身売りしたときの借金を完済し、年季が明けるまで間があるのだが、割礼ショーに出るのと引き換えに引退を許されるのとのことだった、むろん、約束が誠実に果たされる保障はなく、クリトリスを失った性器でひどい性向痛に耐えながら体を売らねばならなくなる可能性は多いにあった。現にそういう愛好家はいて、そんな女を目当てにここを訪れるものも多かった。曲がりなりにも覚悟してショー臨む少女だったが、緊張で震えているのは誰の目にも明らかだった。その少女は日本の女学生のように古風なセーラー服を着せられていた。客の大半を占める日本人には圧倒的に受けがよいコスチュームだった。司会の女が例の明るい声で次のショーの開始を告げた。

その日の深夜、真砂子は島の故物商を訪ねていた。島を訪れる外国人の女は滅多にいない、それだけに目立つのは避けられなかった。万一、例のショーを隠し撮りしたジャーナリストと分かれば命の危機だった。空港で待ち伏せされて島を出られなくなる事態を招かないため、こうして故物の買い付けという理由を作っておいたほうが安全だった。島の遺跡からはポルトガル人来航以前の石器が多少は出る。売りに出されるのは盗掘品であるし持ち出しは禁止されているが政府が満足に機能しないこの国のこと、規制は無いも同然だった。真砂子は安値を言い、交渉を決裂させた。ここに来た理由で怪しまれなければ十分だった。明け方近く、故物商のアジトを出た真

砂子はそのまま空港へ向かいペクエノ諸島を発った。買収した投光係は夜のうちに船を雇って島を出たはずだった。真砂子の取材行李の中にカメラがあった、その中のハードディスクには昨晩、五人もの少女が次々と性器を切り取られる阿鼻叫喚の映像が納められていた。日本に帰ればこれを世界に向けて配信する仕事が待っていた。

第三章

飛び立ったプロペラ機がゆっくりと左旋回をした。窓際に座った真砂子の眼下に白い砂浜が見えた。その砂浜から青い太平洋へむかって赤茶けた鉄骨をさらして、今はもう使われることのない桟橋が伸びでいた。つい十年前まで、この桟橋から世界中に向けてリン鉱石が輸出されていた。第三世界での人口増加で食料の増産が急務だったころ、この島で化学肥料の原料としてリン鉱石の採掘が始まった。良質のリン鉱石が露天掘りできる絶好の環境に多国籍企業が群がった。利権をめぐって部族の間で緊張が高まったとき、政府が採った解決策は多国籍企業からの配当を国民一人一人に頭割りで支払うという方法だった。素朴な漁業ではとても稼げない金が政府から無償で与えられ、部族間の対立は霧散した。海外旅行や美食が流行し、生活を維持する労働力さえ海外から輸入するようになり、そして、リン鉱石が尽きたとき、その繁栄も終わった。地中に眠るリン鉱石を精製すればまだ数十年は産業として成立するのに、そのための資本の蓄積はなされていなかったのだ。

真砂子はゆっくりとノートパソコンをたたむと大きく伸びをした。帰りの飛行k時の中、そして空港からの特急列車、このタクシーの中とほとんど休みなくキーをたたいて、ようやく今回の取材をまとめ上げたところだった。普段から忙しい真砂子の習慣で移動時間を無駄にしなかった。本来ならこのまま出版社へ向かうところだったが、この日は特別に寄るところがあった。真砂子は自分の髪が潮風を吸ってべたついているのを気にして、せめてホテルに寄ってシャワーだけでも浴びてくるべきだったと後悔していた。そんなことを気にしている間にタクシーは目的地の病院のエントランスに横付けされた。これから見舞う病室ならあらかじめ聞いてあるので、真砂子は受付に寄らず、すたすたと奥のエレベーターホールに向かって

いった。扉の脇に掲げてある名札を見ながら真砂子は長い廊下を歩いて目当ての病室を見つけると扉をそっと少しだけ開き。中を伺った。

病室は差額のつく一人部屋で、パジャマ姿の母親がベットの背もたれを起こして座っていた。その脇で小学生の娘が宿題をし、時折、母が計算に詰まった箇所を教えていた。

「あの、文子さん。いいかしら？」

少しだけ開いた扉から顔だけ見せて真砂子が言った。その声に文子と呼ばれた母親があわてて振り返り、早く入るように手招きした。娘のほうはやりかけの宿題をたたむと、ぺこりとお辞儀をして真砂子と入れ替わりに出て行った。これから母と真砂子が子供の前ではしにくい話題をするときちんと察している利発な娘だった。

「取材はどうだった？来るのは今日の夕方と思ってたから、準備もしないでごめんなさい。」

文子が言った。冷蔵庫を勝手に開けていた真砂子のほうは背中を向けたまま、気にしなくていいと軽く片手を挙げて、取り出した冷たい紅茶をぐいぐいと飲んだ。

「娘さん、しっかりしてるわね。で？痛みとかはどう？」

ペットボトルを半分ほど一気に飲んで一息ついた真砂子が言った。鎮痛剤が効いているおかげで痛みは耐えがたいほどではなく、娘が何かと助けてくれていると文子は答えた。

「わざわざ、痛い思いをして切ったものを、また痛い思いをして元に戻す・・・。」

真砂子がため息混じりに言った。文子が受けた手術のことを言っていた。少女たちに性器切除を強いたあの極端な禁欲主義も長くは続かなかった。ほんの数年で義務としてそれを強いる学校は減り始め、性器切除を推奨する法律は死文化した。今ではスパルタ式を標榜する一部の学校が例外的に校則で性器切除を定めているのみで、それも義務ではなく推奨という内容だった。文子のあの娘はもう恐ろしい通過儀礼として性器切除を強いられることはなかった。性器切除

に一貫して反対してきた人たちが雪解けと呼ぶ世相の中、かつて性器切除をうけた女たちが続々と自分の性器を復元する手術を受けていた。
「まったく、股から歯が生えたわ。」
文子が苦笑いして言った。クリトリスの神経までは技術的に復元が難しく、親知らずを抜き、その中にある神経を移植することで代えるのだった。股に歯という妙な言い回しに真砂子も笑った。
「まあ、痛みが引いてもしばらくは違和感が残るわよ。そうね、なんか別の生き物が寄生しちゃったみたいでね。旦那さんは責任重大だわね。」
にやと笑って真砂子が言った。未亡人として女手一つで娘を育ててきた文子にも新しい婚約者ができていた。復元したクリトリスの違和感をなくすにはその器官を使うこと、つまり、刺激を与えて快感を得るのが一番だった。新たな結婚生活で充実した性生活があれば、早々に違和感は消え、復元したクリトリスも完全に文子の一部となるはずだった。いささか露骨な物言いに、文子も苦笑いをした。真砂子が契約する出版社のデスクを担当している文子とは仕事上の相棒であるだけでなく、こうして女どうしで猥談の興じることもある仲だった。
「それにしても、あなたは偉かったわ。私はこうして安全な状況になってからでなければ手術に踏み切れなかった。でも、真砂子さんは闘ったのよね。」
文子が言っているのは真砂子が受けた性器の復元手術のことだった。時期はまさに予防接種でもするように少女たちが集団で性器切除を受けさせられていたころで、この通過儀礼を受けないものは社会的に落伍させられていた。その真只中で、二十歳そこそこの真砂子は性器を復元すると公表した上で海外に渡航し手術を受けた。轟々たる非難を跳ね返すように、その後のジャーナリストとしても真砂子は危険な取材に挑み続けたのだった。褒められていささか照れた真砂子が仕事の話に移ろうとしたとき、扉が開いて看護婦がワゴンを

押して入ってきた。ガーゼを交換する時間らしい。終わるまで廊下で待っていると真砂子が部屋を出た。
　消毒の臭いの混じったひんやりとした空気が流れる廊下のベンチに腰掛けて、真砂子は文子の処置が終わるのを待った。ふと気がつくと、普段はこれしか履かないジーンズの下で、ショーツのクロッチをクリトリスが突き上げていた。先ほどの猥談せいだった。まるで男子中学生だと真砂子は一人で苦笑した。人一倍恋愛願望もあり、性欲だって十分ある歳だった。しかも、もう若いといえる時期も終わりに差し掛かった真砂子ではあったが、弛むことのない体と整った顔立ちで化粧気のなさを補えるほどに美しかった。それが仕事にかまけているうちに、恋愛はおろか仕事を離れた男友達すら稀なまま ここまで来てしまった。消毒薬の臭いが、母に手を引かれて、恐ろしい性器切除を受けるために病院へ連れてこられた日を、真砂子に思い出させた。ちょうど、こんなひんやりする廊下のベンチで、母が激しく医者と言い争う声を、まだ少女だった真砂子は聞いていたのだった。
　ビデから出る温水の刺激につい恍惚としてしまっているところを母に発見された日、真砂子はひどい折檻を受けた。蚯蚓腫れが破れて血が流れるまで打ち据えられた尻に瘡蓋ができ、それがようやく自然にはがれ始めたその週末、真砂子は母に引かれて病院へ行った。母としては娘のクリトリスを切り落としてしまうつもりだったが、予約を入れておいた医者がそれに難色を示した。まずカウンセリングをし、必要とあれば投薬し、またどうしても自慰癖が抜けず、それが悪影響を及ぼすようならトラウマを作らないためにも麻酔をして処置すると医者は言った。後に情け容赦なく麻酔なしでクリトリスを切り落とす手術が一般化するが、この当時ではまだこれが一般的な医者の見解だった。激しく言い争った末に、母は真砂子を引きずるように家に帰った。自慰をするような娘は痛みを与えて罰しなければならないと母は言い放った。
　ちゃぶ台を片した狭い和室で、仁王立ちになった母の足元で真砂

子は畳の上に新聞紙を敷き詰めていた。これから母が自ら娘のクリトリスを切り落とすのだ。新聞紙はその血が畳につかないためのもので、それを自ら敷く真砂子の小さな体が震えていた。盆の上には母が本の通りにそろえた道具が乗っていた。体罰を伴う家庭の躾を善しとするその本は自慰癖をなくすための性器切除を割礼と称して紹介していた。後にはこの割礼という呼称のほうが一般的となる。その本の巻末の図解を見ながら母は仁王立ちのまま手順を確認していた。真砂子が新聞紙を敷き詰め終わるのと同時に、エプロンを掛けた父が入ってきた。この日は母の言いつけどおり、早く帰宅した父だった。母が本を置いて顎をしゃくった。逆らえない真砂子は真っ青な顔で服のすそに手をかけた。震えながら真砂子はトレーナーを脱ぎ、スカートの中に手を入れて、何の飾りもない白いショーツも脱いだ。スカートと靴下も脱ぐと真砂子の身に着けているものは下着として着ていた白いシャツ一枚になってしまった。そろそろ胸のふくらみが目立ち始めた真砂子だったが、娘が大人の女になっていく様に露骨な不快感を示すこの母はブラジャーを買い与えなかった。真砂子がエプロンを掛けて胡坐をかいた父の前に座ると、母も敷き詰めた新聞紙の上に膝をつき、盆の上にそろえた道具の中から薄手のゴム手袋をとった。

胡坐をかいた父の膝の上で、真砂子は幼児が小用を足すような姿勢で膝を抱えられ、脚を開かされていた。シャツの裾を引っ張って股間を隠そうとしていた真砂子の手を、母がぴしゃりと打った。真砂子が手を離すと母はシャツをへその辺りまでまく利上げ、下りてこないように寄せて結び目を作った。単にシャツに血がつかないようにというだけのことで、思春期の娘の心痛はまったく考慮に入っていなかった。ぎゅっと目を閉じた真砂子の目じりに小さな涙の粒があった。父の体に背中で寄りかかっている真砂子に、父の体温と息遣いが伝わった。母に逆らわないことと、仕事にかまけて家に寄り付かないことで家庭内の煩わしさから逃げてばかりの父だったが、真砂子の背中に伝わる体温は温かだった。この人間的な温かみが一

度も娘である自分に向かないことを真砂子は悲しんだ。目をかたく閉じた真砂子にはわからないが、母は自分の娘の股間を見て、毛こそ生えていないものの発育の兆しを見せ始めたその女性器に憎々しい表情をした。酒精度の高い消毒用のアルコールを充填した霧吹きで、母は手袋をはめた自分の両手を消毒した。誤飲防止のために着けられた、たまねぎが焼けたような臭いが漂った。母はヨードチンキを浸したガーゼを指で瓶からつまみ出し。真砂子の股間を拭いにかかった。ガーゼが恥丘に触れた瞬間、真砂子の細かく震えていた体がびくりと跳ねた。母は大陰唇をめくりその内側まで丁寧に拭った。ばい菌への対策だが、この母の感覚では女性器とはその巣窟で忌々しく不浄な器官だからだった。尿道にぐりぐりと抉られるようにガーゼを押し付けられて、痛みで真砂子が小さくうめいた。真砂子の両手は浅い呼吸で小刻みに上下する胸の前で、爪が食い込むまできつく握られていた。最後に肛門を必要以上の強い力でぐりと拭って母はヨードチンキの染みたガーゼを捨てた。続いて取り出したのは、引っ張れば締まるように輪を作った木綿糸だった。その木綿糸をコップに注いだアルコールに浸してから、母は真砂子のクリトリスの包皮をつまみ、慎重に剥いた。ピンク色の粘膜でできた突起が外気にさらされ、真砂子のすべすべした白い太ももの内側が痙攣した。母はその突起のなるべく根元に近い部分に輪かけて、すっと糸を引いて輪を締めた。母が手を放すとクリトリスの包皮から木綿糸がぶら下がったような景色になった。真砂子は父の膝の上で震え続けていた。母は新品の和剃刀を取り出し、それをコップに注いでであったアルコールに浸した。ガスライターに火をつけ、アルコールで塗れた刃を軽くあぶると母はその剃刀を右手に持って構えた。母に左手がクリトリスから垂れ下がった糸を掴むと容赦なくそれを引っ張った。

「ひぃ！」

神経の塊とも言っていいクリトリスに糸が食い込んで、鼻腔が酸っぱくなるような鋭い痛みに、我慢強い真砂子もついにかすれた悲鳴

を上げた。母がそのまま力を込めて糸を引くと、クリトリス本体が引き伸ばされ先端が包皮の外に出た。真砂子の全身に鳥肌が立っていた。それでも容赦なく母は糸を引っ張り、とうとう引っ掛けた輪の部分があらわになった。真砂子にもいよいよクリトリスを切り落とされる激痛が襲ってくるのだと分かっていた。迫ってくる恐怖に耐え切れず目を開けたとき、真砂子が見たのは自分の性器を切り落とそうとしている剃刀だった。

「うわあ！」

パニックを起こした真砂子の声と同時に母は糸の輪よりもさらに根元でクリトリスを切った。

「ぎゃああ！」

人間の悲鳴というよりは獣の断末魔のような絶叫に、力を込めて真砂子を押さえていた父が怯んだ。父の手を振り解いた真砂子がすさまじい悲鳴を上げながら転げまわった、敷き詰めていた新聞紙などは跳ね除けられて、畳の上に転々と血痕がついた。糸の先に切り落とされた真砂子のクリトリスがぶら下がったものを持ったまま、母が金切り声を上げてののしった。

病院の廊下で真砂子がはっと我に返った。嫌なことを思い出したせいか顔が汗ばんでいて、普段から化粧をする習慣のない真砂子は掌で顔を拭った、その手に汗ではないものがついた。真砂子が気がつかないうちに涙が目じりに溜まっていた。あの日、自分が奪われたものはクリトリスと性感だけではなかったと真砂子は思う。少女が性愛に目覚めるのは自然なことだ。愛しみつつ育むべき目覚めつつある性をあの母は無残にも切り落とした。人生をかけた闘争を覚悟してまで真砂子が取り戻そうとしたのは、クリトリスというよりも自分の半身だった。ワゴンを押した看護婦が病室から出てきて、真砂子に軽く会釈をして次の部屋に入っていった。仕事の話をせねばならない。今回の取材の成果を効果的に発表できれば、救える少女たちがいるのだった。戦闘的な精神に戻らなければならなかった。真砂子が小さく一息吐いたとき、その顔はすでにきりりと引き締まっ

た歴戦のジャーナリストに戻っていた。